

John Keats の1817年詩集の意義

—negative capability の萌芽—

三 浦 勲 夫

1

1817年詩集、『エンディミオン』、1820年詩集の三冊が John Keats の生涯 (1795—1821) において出版された作品である。社会的活動としては、この約4年の間しか持たなかった詩人であった。もっとも、個人的には1815年頃から真剣に書き始めているのであるが、それにしても、わずか5・6年の活動に過ぎない。

この急速な成長の中で、最も注目すべき時期は、何といても書簡に negative capability について記した頃、つまり1817年12月あたりだろう。そのほぼ10ヶ月後には、詩人の性格は「無」であり、あらゆる存在に同化しようと論じるのであるが¹⁾、1817年12月の手紙では、当否の判断を一時中断して、疑惑、神秘の中に留まる能力が過去の文学的天才、殊にシェークスピアが最も豊かに備えていた能力である、とキーツは説明しているのである²⁾。

そのあと『エンディミオン』を経て、1819年の「驚異の年」を迎えるのである。しかし、negative capability は、1817年の12月以後にキーツに備わったものではない。Edmund Spenser の *The Faerie Queene* の一句 'sea-shouldering whales' に接して、思わず身をのぼして、自分の体で鯨のイメージを表現して見せた少年時代のエピソードがあるが、その能力はキーツの生得のものであったといえる。ところで、1817年詩集を読みなおしてみると、ここには、いわゆる「消極能力」の根を形成するともいえる美意識が発見される。そればかりか、キーツが再三用いた語、即ち「無」—nothing—とは、何であったのかと

1) Letter 118 (October 27, 1818)

Hyder Edward Rollins, *The Letters of John Keats* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1976)

2) Letter 45 (December 21, 27?, 1817)

...at once it struck me, what quality went to form a Man of Achievement especially in Literature & which Shakespeare possessed so enormously—I mean *Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason—Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated verisimilitude caught from the Penetralium of mystery, from being incapable of remaining content with half knowledge.

いう問いに答えてくれるものがある。そして、普通、「消極能力」と訳されている *negative capability* だが、それは‘消極的’な自己解体にとどまるものではないことも、作品の中にあとづけられる。

1817年詩集は、比較的長い二つの詩、即ち、*I STOOD tip-toe upon a little hill* で始まる無題の詩と *SLEEP AND POETRY* が巻頭と巻尾を固めている。それにはさまれて、17篇のソネット、3篇の書簡体詩、その他スペンサーの影響の強い中世的、乃至神秘的な幾つかの作品が、並べられている。多くの詩が、キーツの詩論を展開し、例示し、詩の究極目標——人を慰め、思想を高めること、言いかえれば、愛と友情——をかかっている。これが、キーツの出発点であったのだ。そして、この究極目標は、生涯変らないものであった。キーツは出発点に於いて既に、それを見すえている。だから、キーツの成長は、直線的に進行して推移したというよりも、むしろ、じっと成熟を待つ木の実にも例えられる。*ripeness is all*³⁾、これは、後の彼が接近して行くシェークスピアの言葉だが、1817年詩集に見るかぎりでは、スペンサーの影響がむしろ強い。その影響は、牧歌的風景、妖精の住む森と泉、城と騎士と美姫の中世、全ての徳を統べる愛、というように様々のレベルにあらわれてくる。

周囲の物の中に、自己を溶解し去る能力は、キーツの想像力の特徴である。想像力とは、経験と記憶に基づいて組み立てられる連想の力である⁴⁾。そのためには想像を喚起するものが必要である。キーツにとって、それは青草のしとねに象徴される自然だった。彼の想像力は、たびたび、その「場」からあるいは仙境へ、あるいは天界へと飛遊するが、やがて「愛」と「友情」の思いにまで高まって満足を得る。つまり、感覚的、経験的、日常的な一つの場から想像は出発して、現実の世界を抜け出すのだが、その脱出だけでは彼は満足していないのである。自分が人間であることを忘れるわけにはいかないからである。人間をさいなむ苦痛、病苦、失望をいやし、精神を向上させるもの、それを与えることが詩の目的となる。これが、1817年詩集にたびたびくり返される言葉である。例えば、*TO HOPE* という小品を読めば、詩は絶望を救う希望である。そこには、あくまで絶望とたたかい抜く詩の力に対する献身的な帰依の姿が見られる。希望を捨てることのないこの態度を、イギリスのユーモアという広い土壌の上に位置づけることも可能であろう。そして同時に、ネガティブ ケイパビリティも、実はアクティブな半面を持って機能していることにも注意すべきである。ネガティブ ケイパビリティ論を生み出した、キーツの美意識のすそ野を確かめながら1817年詩集の主な作品を吟味してみたい。これが、本稿の主なねらいである。

3) *King Lear*, V. ii. 12 (Cambridge: Cambridge University Press, 1962)

4) Stuart M. Sperry, *Keats the Poet* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1973) chap. 1

2

スペンサー (Edmund Spenser 1552?-99) の名が随所に散見される。直接、間接に彼に関連ある物として、*SPECIMEN OF AN INDUCTION TO A POEM, CALIDORE*⁵⁾, *IMITATION OF SPENSER, TO MY BROTHER GEORGE, TO CHARLES COWDEN CLARKE* 等がある。そして、スペンサーの影響は先述の通り多様ではあるが、ここでは先ず中世と妖精の世界に限って、これを見ていきたい。*SPECIMEN...*は、騎士道の物語りを書きたい衝動を述べているものである。かぶとの白い羽飾り、朝の冷気にきらめく槍、good Knight, lady sweet がまぶたに映る。Lo! I must tell a tale of chivalry; (1) キーツの求める物は、カラマツ林の中のツタにおおわれた、ゴシック式の長いアーチに今も去りやらぬ (linger yet, 33) 吟遊詩人達の歌の残響であり、或いは、槍と武具を壁にたてかけ、かるやかに歩む貴婦人達と丁重に語り (courtly talk, 43) 大盃を傾ける、華やいだ宴である。しかし、時代を経てそれを今また歌うことは難かしい。

No, no! this is far off:—then how shall I
Revive the dying tones of minstrelsy,
Which linger yet about long gothic arches,
In dark green ivy, and among wild larches? (31-34)

しかし、書かねばならない。その為に、スペンサーの精神の加護 (tender care, 57) を求めるのである。

Spenser! thy brows are arched, open, kind,
And come like a clear sun-rise to my mind; (49-50)

そしてその詩には、それにふさわしい想像力の「場」が必要になる。スペンサーは、緑したたるアイルランド島の牧野を愛した。彼の加護を得て、キーツも野原、林、なだらかな丘、朝、夕、光、陰、花、清流、湖、そびえる塔などを見たい、と期待してこの詩は終る。

そうした牧歌的背景の上に始まるのが、次の *CALIDORE* である。ここにあるのは、I stood tip-toe upon a little hill... の明けそめる朝とは対照的な、夕べの風景である。入相のたゆとう光に全てが包まれた湖である。ひとつひとつの移ろいが「美」として感覚される。キーツにとって、美とは何よりも現実のうつろう物、消えゆく物であるからである。

5) Calidore という人名は *The Fairie Queene* の第六巻、The Legend of sir Calidore, or of Courtesy の中にも出ている。

Young Calidore is paddling o'er the lake;
 His healthful spirit eager and awake
 To feel the beauty of a silent eve,
 Which seem'd full loth this happy world to leave;
 The light dwelt o'er the scene so *lingeringly*. (1-5. イタリックは筆者)

ほとんど目にもとまらぬ速さで、しきりに舞いとぶ一羽のツバメ。一瞬、翼を休めては水面をかすめる、その波の輪が幾重にも拡がって消えて行く。I STOOD tip-toe...の小魚の群の例と同じで、有から無へ、そして無から有へと変転を続ける自然の相が、キーツの目につつの実を結ぶのである。

Scarce can his clear and nimble eye-sight follow
 The freaks, and dartings of the black-wing'd swallow,
 Delighting much, to see it half at rest,
 Dip so refreshingly its wings, and breast
 'Gainst the smooth surface, and to mark anon,
 The widening circles into *nothing* gone. (13-18. イタリックは筆者)

nothing という言葉が、端的に「変転」を指示し、強い衝撃を我々に伝えるのである。Calidore は、湖上の遠望、近景を心ゆくまで味わう。時間の回り舞台の上で、それらは夕刻をうごめいている。そして、彼自身もその中に溶け入っている。しかし、遠いラッパの音が、尊敬のまゝである騎士達の帰館をしらせる。小舟のへさきを返し、城へと急ぐ彼は、ナイチンゲールが歌い出した声、白鳥がまどろみ出した水草のしげみ、夕闇にかすみ出す城も、もはや耳目に入らない。折り戸を開ける手ももどかしく、城の広間、通路をかけぬける。中庭におどり出ると、今しがた二頭の駿馬と二頭の小馬がそこにたどりついたばかり。カリドアは、礼節をつくして二人の貴婦人をむかえる。手を取り、口づけし、馬から抱きおろす。その髪は涙か、露に湿り、彼はかいなに受けとめた柔らかい至室に陶然とする。その手の美しさは仙境から抜け出て来た者のようである。

All the soft luxury
 That nestled in his arms. A dimpled hand,
 Fair as some wonder out of fairy land, (92-94)

更に、good Sir Clerimond の優しい声。これ又、この世ならぬ声に聞こえ、カリドアの血は新たな感激にうちふるえる。ついに、美は抽象化されて、尽きることのない悦びとなる。

Thank'd heaven that his joy was never ending; (104)⁶⁾

温厚な good Sir Clerimond も勇猛な brave Sir Gondibert も graceful で courtly である。特にクレリモンドのよろいの柔らかかそうな美しさは理想化される。

His armour was so dexterously wrought
In shape, that sure no living man had thought
It hard, and heavy steel: but that indeed
It was some glorious form, some splendid weed,
In which a spirit new come from the skies
Might live, and show itself to human eyes. (116-121)

晩餐の席では、一同がゆったりと窓から見える夜空と入りこむ夜風のそよぎを楽しんでいる。カリドアの胸は、卑劣な悪とたたかった騎士の話、いかに勇敢な行為が乙女の恐怖、絶望を救ったかの話を聞こうと燃えたっている。しかしながら、騎士達の宴を、カリドアという若者の目を通して思い描くキーツの関心は、勇壮なエピソードにあるのではない。キーツは、騎士道に限りない愛着を込めながら、中世の一つの愛の姿を語りたいのである。その日は遠く去り、宮廷愛と吟遊詩人の歌声が、はるかに時を隔てて、懐旧を誘う時代にあって。

キーツをひきつけたスペンサーの風景は、牧歌的であると同時に、又、神秘的でもある。妖精が遊び、人界を遠ざかった世界だ。IMITATION OF SPENSER の中で、キーツはこの不思議な風景をよびおこそうとする。擬人化された朝。緑の丘。朝日に光る小川。苔むした岸边。湖。それを囲む木立ち。カワセミの輝く羽。絹のヒレ、金色のウロコを持つ魚。白鳥とその背にのった妖精。岸边に散り、波に洗われる赤いバラ。わずか36行に、多過ぎる程のイメージを点じ、その全てが超自然的な光に包まれている。たとえば、岸を洗うさざなみは、

As if to glean the ruddy tears, it tried,
Which fell profusely from the rose-tree stem!
Haply it was the workings of its pride,
In strife to throw upon the shore a gem
Outvieing all the buds in Flora's diadem. (32-36)

又、水に浮ぶ中島の持つ魅力は、この詩に限らずくりかえしキーツの想像力をひきつけ、

6) Cf. *ENDYMION*, I. 1. A THING of beauty is a joy for ever:

例えば、のちにナイチンゲールの賦に於いては、逆巻く怒濤に孤立する魔城の窓となる⁷⁾。キーツの魔力への傾倒は、そこに尽くされる。妖しい世界の極致である。

Ah! could I tell the wonders of an isle
That in that fairest lake had placed been,
I could e'en Dido of her grief beguile;
Or rob from aged Lear his bitter teen:
For sure so fair a place was never seen,
Of all that ever charm'd romantic eye: (19-24)

キーツにとって想像力こそは、有限の人間を無限の永遠に結びつける不思議な魔力でもあった。それが、スペンサーの妖精の世界にたどりつくことも明らかである。

3

そして三篇の書簡体詩が組み込まれている。そこでは、友情と兄弟愛、文学の先達への尊敬を謙虚にうたい、併せてキーツの作詩法、詩観にもふれている。1815年、キーツはガイ医学校の医学生となり、ごみごみしたロンドンの一角、ディーン街に下宿していた。それは、とうてい彼の詩想の「場」とは成り得ないものであった。そこで、思い立って彼は1816年に、海岸の町マーゲートに一人逗留して詩を書くのである。本格的に詩の創作に入っているためのロンドン脱出であった。この間の、人間的交流、疎外、瞑想がこの三篇に盛られている。そこには、妖しい幻想の世界から、キーツを再び現実へとおろ立たせる、人間性への渴望がある。あたかも、ロンドンの人界を離れて、草のしとねに寝ころび、はじめて恋しい物を発見したかのように。TO GEORGE FELTON MATHEWの中には、ロンドンの下町 (dark city) に対する幻滅の言葉がある。そして、これと比較されるのが、やはり緑陰の詩想の「場」であった。

But might I now each passing moment give
To the coy muse, with me she would not live
In this dark city, nor would condescend
'Mid contradictions her delights to lend.
Should e'er the fine-eyed maid to me be kind,
Ah! surely it must be when'er I find
Some flowery spot, sequester'd, wild, romantic,
That often must have seen a poet frantic; (31-38)

7) Cf. ODE TO A NIGHTINGALE

The same that oft-times hath/Charm'd magic casements, opening on the foam/Of perilous seas, in faery lands forlorn.

しかし、彼は自然美のよろこびのみに満足するのではない。たとえば、この場にも、光に対する影、生に対する死、の拮抗がある。喜びに対する沈うつがある。

There must be too a ruin dark, and gloomy,
To say 'joy not too much in all that's bloomy.' (51-52)

現実を見つめるには、人間を見つめる場が必要だ。彼は、文学と歴史の中に大きな人間性を発見しようとする。それを欠いては詩は生まれない。彼は自然を描くことによって人間を思い、人間を思うことによって時の流れを縦横に走る。彼の詩の中で、自然と人間は融離・融合を重ねていく。このようにして、彼は美を永遠の真としてとらえていこうとしたようにみえる。

Yet this is vain — O Mathew lend thy aid
To find a place where I may greet the *maid* —
Where we may *soft humanity* put on,
And sit, and rhyme and think on Chatterton; (53-56. イタリックは筆者)

その他、人間のためにたたかった英雄達、ミルトン、アルフレッド王、ウィリアム・テル、ウィリアム・ウォラス、バーンズなど。それらの人々への思いを欠いては、詩は生まれない、という。

Felton! without incitements such as these,
How vain for me the niggard Muse to tease: (72-73)

友情と愛情を欠いては詩は成り立たない、という信念は三篇の書簡体詩に於いて最も直接的に吐露されるところとなる。そして、*TO MY BROTHER GEORGE* は弟への愛である。同じ主題で書かれたソネットでは、自然美の喜びに勝る兄弟愛が次のようにうたわれた。

But what, without the social thought of thee,
Would be the wonders of the sky and sea? (13-14)

しかし書簡体詩の方は、弟に詩の持つ超自然の力について説明する点でも注目される。スペンサーの意見に共鳴しているのだが、注意すべきは、これがいわゆる *negative capability* の先駆的な解説でもあることだ。スペンサーは、雲の上に白い駿馬、うちまたがる騎

士、金色の宮廷を見る、という。キーツもそれを信ずる。それは、現実とは隔絶した永遠の理想であって、時間と空間のくびきを知らない。詩人達が自由に入り込み、かいま見る世界である。キーツは、それが、天才の持つ能力であると信じ始めている。しかし、それは天才の能力の一半に過ぎないことも、直感している。なぜならキーツの詩には、もう一つ重要な目的——人間的な——があるからである。しかし、それとは別に我々は、キーツの詩の根本を支えている物を忘れてはならない。何よりもまず、彼の詩は、たゆたい、うつろう美、即ち自然の生と死、無と有のドラマによって開始されるという事実である。後述することではあるが、そこにあるものは、一種の無常観であるといえる。ところで、キーツの説明するスペンサーの自己解体 (trance) の様子は次の通りである。

But there are times, when those that love the bay,
Fly from all sorrowing far, far away;
A sudden glow comes on them, naught they see
In water, earth, or air, but poesy.
It has been said, dear George, and true I hold it,
(For knightly Spenser to Libertas told it,)
That when a poet is in such a trance,
In air he sees white coursers paw, and prance,
Bestriden of gay knights, in gay apparel,
Who at each other tilt in playful quarrel,
And what we, ignorantly, sheet-lightning call,
Is the swift opening of their wide portal,
When the bright warder blows his trumpet clear,
Whose tones reach naught on earth but Poet's ear. (19-32)

更にキーツは、涼しい夜風を額に受けて散策する時、詩人は月や星を見ても豊かな幻想に打たれることを述べる。又、詩人の個人的なよろこびが、後の人々に大きな恵みを与え、自分の歌もやがて愛唱され、うたいつがれていく様子を、いろいろ空想する。イギリスの緑野と人々が鳥瞰される。その視点が高ければ高い程、喜びも高まるのだが、そのかわり、現実との距離も遠のく。

Fair world, adieu!
Thy dales and hills, are fading from my view:
Swiftly I mount, upon wide spreading pinions,
Far from the narrow bounds of thy dominions.
Full joy I feel, while thus I cleave the air,
That my soft verse will charm thy daughters fair,
And warm thy sons!' Ah, my dear friend and brother,
Could I, at once, my mad ambition smother,

For tasting joys like these, sure I should be
Happier, and dearer to society. (103-112)

ポエジーは、マンネリズムとなった通俗性からは生まれない。ポエジーは詩人によって通俗界の抜け穴からとらえられ、時間をのりこえて光を投げかける。キーツのポエジーは、誕生するためには通俗性を離れ、光を得るためには、人間性を得なければならない。或る意味では、キーツにとっては、通俗を脱することが彼の自己解体であった。それは、一方では大きな私的悦楽を提供するのだが、キーツは、それだけでは不安であった。現実を犠牲とする痛みを無視できなかったからである。その意味では、彼は徹底的な感覚派ではない。

Now I direct my eyes into the west,
Which at this momont is in sunbeams drest:
Why westward turn? 'Twas but to say adieu!
'Twas but to kiss my hand, dear George, to you! (139-142)

このように、常に人間への慈しみが顔をのぞかせているのである。更に書簡体詩として、*TO CHARLES COWDEN CLARKE*が続く。Clarke は、少年であったキーツに文学をひもといた年長の友人である。他の二篇と同じくこの書簡体詩でも、キーツは先ず詩を書く筆が遅々として進まないことを弁解している。そこにあるのは「時を失なった」自分だ。

Just like that bird am I in loss of time (15)

時の、とうとうたる流れの中で、瞬間を凝縮してえぐり取ろうとして果たせないでいる。その一瞬こそが、永遠を語る物なのである。白鳥のくちばしをこぼれ、胸の柔毛をすべり落ちる水のしずく。その宝石のしずくこそ、キーツのとらえたい永遠をこめた一瞬だ。それは、実にたよりなく、実にはかない。しかし、時を失なって、すなわち現実を脱して、貴重な代償を得ようとする姿が、不思議な実感をともなって、白鳥のイメージから迫ってくる。水滴をダイヤモンドに変える力を得ること、一瞬で消滅する物を何とかして定着させたい、これがキーツの願いである。孤独、すべり去る時間、はてしない循環。その中で漂泊する自分。

anon¹he¹sports,—

With outspread wings the Naiad Zephyr courts,
Or ruffles all the surface of the lake

In striving from its crystal face to take
 Some diamond water drops, and them to treasure
 In milky nest, and sip them off at leisure.
 But not a moment can he there insure them,
 Nor to such downy rest can he allure them;
 For down they rush as though they would be free,
 And drop like hours into eternity.
 Just like that bird am I in loss of time,
 Whene'er I venture on the stream of rhyme;
 With shatter'd boat, oar snapt, and canvass rent
 I slowly sail, scarce knowing my intent;⁸⁾ (5-18)

永遠とは、時と場所を問わず、常に身の回りをとり巻いていながら、それをつなぎとめることは難しい物だ。なぜなら、万物は変転をやめることがなく、絶えざる変化が日常なのだから。しかし、ここでキーツは二人の偉大な詩人を思い起こす。スペンサーとミルトンは、「人間の境界」を出て、永遠を見たのである、と。

Spenserian vowels that elope with ease,
 And float along like birds o'er summer seas; (56-57)

Miltonian storms, and more, Miltonian tenderness; (58)

キーツが自己を解体する時、詩の言葉もおうおうmとかlの多い流れる音を帯びる。それは特に『エンディミオン』において著しいのだが、その遠因もこれまたスペンサーであるようだ。スペンサーの母音は、夏の水鳥のように自由に水面と空中をすべる。それは、先述した弟ジョージへの書簡体詩のカモメの姿にピッタリである。

And the broad winged sea-gull never at rest;
 For when no more he spreads his feathers free,
 His breast is dancing on the restless sea. (136-138)

変転する自然、それがこの世の美である。そして美は永遠の相に定着する時に真となり、くちることのない力を得る。この美と力を兼ね備えているのが、ミルトンだといえる。tenderness と storms は Good Sir Clerimond と Brave Sir Gondibert がそれぞれ象徴した物——美と力——でもある。スペンサーは、かろやかな母音の調べにのって通俗

8) ボロボロの船の航海を救うのも想像と空想である。Cf. letter 38 (October 8, 1817)
 ...a long poem is a test of Invention which I take to be the Polar Star of Poetry, as
 Fancy is the sails, and Imagination the Rudder.

性の抜け穴を見つけ、ミルトンは、そこから美と力を得た。後に『エンディミオン』に於いて、静寂の洞穴 (Cave of Quietude)⁹⁾ という考え方にたどりつく。苦痛は痛まず、よろこびもあきることがない洞穴¹⁰⁾。これが、通俗性を脱する抜け穴であり、そこに美と力を宿している。未だ1817年詩集の段階では、両者がこのようにまとまった一つのイメージを得てはいないけれども、相補的に並置されていることは確かである。

4

移ろう自然が美としてとらえられる。同様に必滅の人間たる自分も、想像力に解体されて、つかの間、理想の世界に入っている。Negative capability を云々する以前に、キーツには自然美の観察眼がある。それを、一種の「無常観」と先述したのであるが、しかし、それは日本的な無常感とは異質である¹¹⁾。それを確かめる為にも、巻頭の詩は興味深い。

I stood tip-toe upon a little hill で始まるこの清新な詩は、あけそめた丘辺のひそやかさを、余すところなく伝える。移ろう景物のひとつひとつの美が、キーツの想像力をすっぽり包み込み、その中で彼の心は蝶のように森の葉かげ、木かげをくまなく訪ずれる。まさに、キーツの想像力を包みこむ、優しくやわらかい一つの「場」が丹念なせんさくの目で展開されている。昼のひざかりの小川、そこに群れては散り、散っては群れる小魚。ヒワのかれんで、せわしない動きは、片時もじつとどまらない。夕闇と共に月が昇ると、キーツの心も地上を離れ、神話と愛の世界に飛遊する。この詩を書き進めながら、キーツは次の作品『エンディミオン』の着想を得たであろう¹²⁾。キーツ的ロマンの世界は、時空を超えた領域に花ひらくが、理想と現実との決定的なへだたりが暗い影を落とそうとする前に、キーツは常に「人間」に回帰してくる。神話は愛を語り、その息吹きを受けた若者達は、苦痛も疲労もこころよくいやされるのだ。詩集中の他の作品と同様に、これも又、詩の与える慰めへと帰結してくる。

Leigh Hunt の *Story of Rimini* から引用した巻頭のモットーが、キーツの魂の最も

9) *ENDYMION*, IV. 548

10) Cf. *ENDYMION*, IV. 526-528

There anguish does not sting; nor pleasure pall:/Woe-hurricanes beat ever at the gate,
/Yet all is still within and desolate.

11) 松浪信三郎編、『ニヒルと無』、至文堂、1967より援用すると——、諸行無常という無常観は、仏教の中でも根本的思想の一つだと言われるが、われわれの間でも『平家物語』の「諸行無常」「盛者必衰」などの思想としてわかりやすい形ででてくる。そうなってくると、存在とか無とかを越えたかなたの、固定的な実体観を破る思想などというはっきりした見方(無常観)ではなくて、どちらかというところ、人生は夢のごとく、泡のごとく、露のごとくといった日本人の情緒的な感じ方(無常感)のほうに変わってくる。(松浪信三郎 p. 8)

12) 実際、この詩ははじめ *ENDYMION* と題されていた。

身近な憩いの場を端的に語っている。

'Places of nestling green for Poets made.'

この「場」から、キーツの想像力は、さまざまな迷路を辿って、四囲の中へ、そして更に、空間と時間の彼方へ飛び立っていく。

今、キーツは小さな丘に、つまさき立っている。大気はひんやりとしずまり、雲も眠っているかのように動かない。明けそめた朝の木々のつぼみは、夜露をなおふくんで、つつましくか細い枝をたわませている。動き出さんとして、鳴りをひそめているその場に、極くかすかないぶきがしのび入る。静寂のもうし子のような木の葉のそよぎである。

A little noise among the leaves,
Born of the very sigh that silence heaves,¹³⁾

「静」から「動」への移転、いいかえれば、「無」から「有」へのゆるやかな移行である¹⁴⁾。そして眼にふれる限りの地平線まで、更に、眼にふれることのない物陰の隅々までを、凝視し、脳裏に描き、想像のよろこびに浸ろうとする積極的な「眼」が、ここでよびさまされる。peer し、picture out し、guess し、vision が活動する。

I gazed awhile, and felt as light, and free
As though the fanning wings of Mercury
Had play'd upon my heels: I was light-hearted,
And many pleasures to my vision started; (23-26)

visionこそ、「無」と「静寂」とから生み出されるもうし子である¹⁵⁾。それは「無」から発して「無限」の世界に踏み入る。そして、他の多くの詩と同様、これも又、visionの一つの軌跡である。

その vision とは——。脳裏に一つの牧歌的な「場」(tasteful nook) が描かれる。蜜蜂が飛び交う五月の花の茂み、その上からまるキングサリ、湿った根元を涼しく覆う高い

13) Heard melodies are sweet, but those unheard/Are sweeter; (*GRECIAN URN*)

14) *HYPERION* の書き出しがまさに「無」から「有」への胎動である。無を示すことばとして、quiet; still; silence; no stir of air; not so much life; voiceless; deadened; nerveless; listless; dead; unsceptred; realmless 等が冒頭に続いている。

15) Thou foster-child of silence and slow time (*ODE ON A GRECIAN URN*); they're more slight/Than the mere nothing that engenders them(=dreams)! (*ENDYMION*, I. 755-6)

草、その日陰に咲くスマレ、イバラのからまるハジバミのいけ垣、夏の微風を受けて高みにあるスイカズラ、その間を縫うように苔むした古根から伸び出ている若木の数々。まぢかには、威勢よく泡立ち流れ出す泉のせせらぎ。しかし、これら一連の若い生命にあふれた景物に、既に「死」が同居していることに注意しよう。何故なら、道端には子供に手折られ、しおれて行くマルバギキョウの花々があり、泉の水は、その死を嘆くかのように、ブクブクと音たてて湧き出しているからだ。かくして、ひっそり静まり返った「無」の朝景色から「生」が胎動するのを感じたのとは逆に、若々しい「生」と隣り合わせにキーツは「死」のひびきをも又、聞かざるを得ないのである。そして、いわば、その「生」と「死」の間を咲き誇るキンセンカとスイートピーの叙述は素晴らしい。太陽神アポロに讃えられる金色のキンセンカと、ひとひらの翼のように今まさに飛びたとうとする白く繊細なスイートピーは、それぞれ、生の持つ力と美を表現する物である。

Open afresh your round of starry folds,
Ye ardent marigolds!
Dry up the moisture from your golden lids,
For great Apollo bids
That in these days your praises should be sung
On many harps, which he has lately strung; (47-52)

Here are sweet peas, on tip-toe for a flight:
With wings of gentle flush o'er delicate white,
And taper fingers catching at all things,
To bind them all about with tiny rings. (57-60)

こうして、全ての物が朝露の如く、生と死の間で佇んでいる。キーツも、(vision の中の)小川の木橋に暫く佇んで (linger awhile), 自然界のうつろい、即ち、静かな営為 (Nature's gentle doings) を眺める。例えば、ゆったりとうねる小川は、水音もない。岸边に垂れる柳にヒソともささやかず、ゆるやかに流れる草の葉がやっと浅瀬の小石に達する迄には、ソネットが二つ読める程だ。何と安らかで、ゆるやかな時の流れ。やがて、小石が並ぶ浅瀬では勢よくせせらぎとなって水音をたて始める。しかし、これも又、キーツの耳には、natural sermon (71) として、水音は「死」のひびきをかなでる。彼は生成流転をそこにきき取っているかのようだ。

又、群れをなして、流れに逆う小魚達。冷たい水中で日光を楽しみ、銀色にきらめく腹を川底の砂礫にやすめているが、一旦、手を差しのべるとその途端、どこへともなく散り姿を消してしまふ。眼を転じると、たちまちもとの場所にむれ集う。このように自然界の移ろいをキーツは、ひたすら凝視 (watch intently, 63) する。

ゴソキヒワ (goldfinch) の例もそうだ。時折、一羽また一羽と低い小枝からおり立つ。しかし片時もじっとしていない。水をふくみ、さえずり、羽をととのえ、そして飛び去る。空中に静止する時には、はばたいて黒と黄のその翼を誇示するかのようだ。こうした場所こそが、キーツにとって想像され得る最高の「場」であった。

Were I in such a place, ... (93)

そして、この「場」から想像力は、一気に空間と時間の彼方へかけあがる。願わくは、そこに、純真な乙女を、夕べのまどろみを、そして何よりも讃えてやまない優美な月を、と。とっぷりと浪漫の陶醉に浸るキーツは、この時、「永遠」をかいま見ている。「現実」は「無」に帰している。

When it is moving on luxurious wings,

The soul is lost in *pleasant smotherings*: (131-132, イタリックは筆者)

快い窒息である。「無」は「有」を生み、自己解体が積極的陶醉を呼ぶ。それが、上のオクシモロンである。キーツのオクシモロンは、このように「無」と「有」の両面を同時にとらえた構造であることが多い¹⁶⁾。pleasant smotherings, これは、超自然的な力が一時的に為すわざである。それが我々を俗界の空高くふき上げて、つかの間、別世界を見せてくれる。少なくとも、キーツはそのように信じているわけで、従って、そのような魔力を表わす言葉がどの作品にも非常に多い。例えば、ここでは、

While at our feet, the voice of crystal bubbles

Charms us at once away from all our troubles: (137-138, イタリックは筆者)

そして、キーツも詩人の原型ともいえる神話作者の想像力へと思いを馳せるのである。例えば、サイキとキュービッドの恋物語り、シリクスとパンのそれ、ナーシサスの無意識の自己耽溺と、彼に突らぬ恋をして木霊となったエコーの話。愛は、あるいは心地よく、あるいは狂おしく、あるいは恐怖でもある。限りない幸をもたらすこともあれば、「無」に帰することもある。しかし、それは人の情熱を燃え上がらせる魔力を秘めている。中でも最大の愛の神話は、シンシアとエンディミオンの話である。キーツは言う。虚空に輝く円かな月姫に、エンディミオンという美しい羊飼いを恋人として考え出した詩人こそ、愛

16) noiseless noise (I stood tip-toe...), deathful glee (ENDYMION, 945), Die into life (HYPERION, III. 130), ditties of no tone (ODE ON A GRECIAN URN), 等。

を知り、人間の領域 (our mortal bars, 190) をふみ越えて、驚異の世界に分け入った人間である、と。

Ah! surely he had burst our mortal bars;
 Into some wond'rous region he had gone,
 To search for thee, divine Endymion! (190-192)

この物語りこそ、「無」の深みから汲み上げた最高のロマンスであった。キーツ自身も、だから、二人の物語りをみずから手がけてみたいと、その決意をのぞかせる。

O for three words of honey, that I might
 Tell but one wonder of thy bridal night! (209-210)

その歌こそ、最も甘美で、常に新らしく、常に心をさわやかにする。愛があり、友情があるから人は慰めを得、元気を得、病いをまぬがれる。キーツの想像は、このように舞い上がっていったんは人間界を離れ去るが、しかしそのつきとめるものは、愛と友情である。だからキーツの想像は、決して地上を離れ去る物とはならない。Health という語は、初期のキーツが好んで用いる語だが、この語の持つ一種の(健康な)倫理観がそこにはあった。想像力の旅の最後の段階で得られる愛と友情は、純粹であり、かつ力強い。さき程の、キンセンカの力とスィートピーの純真を考えあわせてみても良い。それは人々の病いを快くいやしてくれる。これが、詩の目的であると、キーツは、ここでもくりかえしてこの詩を結ぶ。

The breezes were ethereal, and pure,
 And crept through half-closed lattices to cure
 The languid sick; it cool'd their fever'd sleep,
 And soothed them into slumbers full and deep.
 Soon they awoke clear eyed: nor burnt with thirsting,
 Nor with hot fingers, nor with temples bursting: (221-226)

以上見たように、うつろい行く物、あるいは、「無」と「有」のドラマに美をみとめる目がそこには存在するのである。ワーズワースの好んで描く自然が、不動の威厳をたたえているのとは対照的である¹⁷⁾。誕生、成長、消滅を際限もなくくり返していく自然、そこには変転しない物はない。全てが、無に戻っていく。無常を見つめる目である。しかし、

17) 阪田勝三、『ジョン・キーツ論考』(南雲堂, 1976) pp. 3~71

これは、大きな積極性をはらんだ無常観である。無常を嘆いて、キーツは現世から隠遁するのではない。又、無常が恒常（永久）を否定するのでもない。そうでなければ、キーツの理想も生まれない。西洋的な「無」と「有」とは熾烈な緊張関係を作り出す。例えば、やはり、スペンサーの『妖精の女王』の中にある『無常』(mutabilitie)の二篇の物語りはその点で注目すべきだ¹⁸⁾。「無」に帰す、ということは「有」の否定に過ぎず、本来ある物は「有」である。それは、変化の一段階であり、新たな「有」への一過程である。その意味で、「無」には本来、一切を生み出す力が内在している。そして、キーツの自然も変転をやめない。心も溶け去っては、visionを結び、真理を追おうとする。心を無に帰して、永遠の相にいたるということは、この巻頭の詩に於いても、古代ギリシャの神話を作り出した詩人の想像力への共感となって表われていた。更に、前述したように、弟ジョージに宛てた書簡体詩においても、スペンサーの自己解体(trance)の例をひいて具体的に説明しているのである。これらが、後の negative capability へとつながる物であることは明らかである。

5

1817年詩集の巻尾を飾る作品が *SLEEP AND POETRY* である。全405行の中には、想像力の段階¹⁹⁾が説明され、詩の目標が定められている。I STOOD tip-toe... や epistles や sonnets にも説明されている、キーツの想像力の特性が大きな構造の中にきっぱりとはめこまれている。そこでは、キーツの繊細さと理想とが、ワーズワース的とも呼べる回想の形式と結びついて、清新な説得力を得ている。詩を生み出す sleep (活動としての) と夜の sleep (休息としての) とが同じ一語で表現されている。ここに、キーツは詩はいわば「さめた眠り」²⁰⁾とも呼べる物から生まれ出ることを歌い上げているのだ。そして、sleep という語が抱えている語義の二重性の中にも、我々は再度、「無」と「有」との交代劇を見るのである。

さて、人々の眼を新たによみがえらせ、朝の光を迎えさせてくれる夜の眠り程に、gentle で、soothing で、tranquil で、healthful で、secret で、serene で、しかも full of visions である物はない。眼に映ずる朝のさわやかな光景は、既に I STOOD tip-toe... に

18) 和田勇一監修、『妖精の女王』(文理書院、1969)の解説から一部を引用すれば——、ここにいう無常は、東洋的な諸行無常の考えとはいささか性質を異にし、無常の中に、変化の中に、人生のすばらしさを見ていこうとする西洋的積極性を持っている。p. 956

19) *ENDYMION* の中の Wherein lies happiness? に始まる「幸福の三段階」へと発展するものである。

20) Was it a vision, or a waking dream?/Fled is that music:—Do I wake or sleep?
(*ODE TO A NIGHTINGALE*)

余すところなく展開された。しかし、それにも増して、higher で、fresher で、more strange, more beautiful, more regal な物がある、とキーツはいう。通俗性(worldliness)と愚行(folly)を払いのけてくれるそれについて考えてみることは、おそろしく、又、限りなくやさしく、しかも神聖である。時には地鳴りのように、時には空中に呼吸している不思議な存在のささやきのように、それは訪れて来る。それを感じ取る者の声は、光(glory)に包まれ、そして心からは歓喜の叫びが上がり、造物主に達する。

And from the heart up-springs, 'Rejoice! rejoice!
 Sounds which will reach the Framer of all things,
 And die away in ardent mutterings. (38-40)

その歓喜の叫びは、やがて熱いつぶやきとなってしずまっていく、という。つまり、叫びは全く姿を消すのではない。「熱いつぶやき」を残していくのである。人間そのもののつぶやきであろうか。例えば、G. F. Mathew に宛てた書簡体詩に於ける 'joy not too much in all that's bloomy.' でもあろう。人間の耳に、天地の恐ろしい、或いは、ひそやかな声を伝えるその者の名は口に出すもはばかられる。ただ、native merit (46)を持った人にもみ経験的に知られるものである。この詩を進めるキーツのピッチ(基音)は、理想に向かってどんどん高まって行く。ポエジーの声を聞き取り、そのこだまを投げ返すためには、山の頂きに坐して待つべきか、と問いかけ、又、月桂樹の花薫る風をポエジーの祭壇より吹き送れ、アポロのいけにえとして、魂が「死」にいたることができるように、と熱い祈りを捧げる。その死は、death of luxury (58)、目くるめく自失である。しかし、キーツの世界はそこで終焉するのではなく、実際はそこから始まる。圧倒的な美に抗して、キーツはその一つ一つを確かめ、感覚していこうとする。決して無感覚なのではない。自失の「無」を分析しようという第二の目が必ずあるのだ²¹⁾。

or, if I can bear
 The o'erwhelming sweets, 'twill bring to me the fair
 Visions of all places: a bowery nook
 Will be elysium — an eternal book
 Whence I may copy a lovely saying..... (61-65)

21) There hollow sounds arous'd me, and I sigh'd/To faint once more by looking on my bliss — /I was distracted; madly did I kiss/The wooing arms which held me, and did give/My eyes at once to death: but 'twas to live, /To take in draughts of life from the gold fount/Of kind and passionate looks; to count, and count/The moments, by some greedy help that seem'd/A second self, that each might be redeem'd/And plunder'd of its load of blessedness. (ENDYMION, I. 651-660)

やはりキーツは、一つの自然の「場」の中に身を置く。それが bowery nook である。それが同時に eternal book でもある。木の葉や、花、精、眠れる乙女たちの言葉を伝えてくれる、興味つきない書物である。そして、キーツの人間研究が出発するところでもある。不思議な力 (influence) によって、どこからともなく詩がささやかれる。一方、「炉辺」もキーツにとっては想像力のとび立つ場となり得る。ひとすじの川、幽谷、かげ深い林、魔力にしばられた洞穴、ぞっとする程に美しく咲き誇る花。このような森厳な自然の神秘を、人間的な室内 (炉辺) で思いめぐらすことにより、人智に能う全てを書きとどめ、この世の出来事を理解する不滅の翼を得よう、と思いは高まる。

たびたびの例からも判るように、キーツの人間研究は自然美を探索することから始まる。自然に没入し、次いで超自然に遊び、人間の根本的な宿命である死と孤独に思い至り、ついに愛と友情に辿り着いていく。緑 (それはキーツにとって重大な意味を持つ「場」なのだ) がなく、まばゆい太陽と白い砂と石だけの極端に乾いた国では、人間が目にする物は、直ちに人間である。立原正秋の旅行記によれば、そこでは人間は人間と対決し、己れの投げる黒い影と対決する²²⁾。そこに徹底した戒律が生まれ、徹底した対人関係と合理精神が生まれる。それが、ヨーロッパ文明の起点である。キーツの人間探究は、いわば、そうしたギリシャの合理精神とヘブライ的超絶思想とをイギリスの肥沃な自然の中に移植した物と考えてみてもよい。

自然の中にキーツは人間 (人生) を発見する。変転する自然、それは美しい物であるが、同時に人間の短い命をも暗示してくれる。

Stop and consider! life is but a day;
A fragile dew-drop on its perilous way
From a tree's summit; a poor Indian's sleep
While his boat hastens to the monstrous steep
Of Montmorenci. Why so sad a moan? (85-89)

しかし、キーツはそれを嘆くことはしない。人間の抱える運命であるから。人生は一面から見れば束の間の夢ではあるが、同時にそれは、永遠の喜びをその一瞬一瞬に秘めてもいるのだ。キーツは、ここでも、限られた時間の中の「永遠の一瞬」を発見しているのである。変転する物の持つ美である。

Life is the rose's hope while yet unblown;
The reading of an ever-changing tale;

22) 立原正明、『風景と慰藉』(中央公論社、1974) pp. 58-70 エーゲ海の島々

The light uplifting of a maiden's veil ;
 A pigeon tumbling in clear summer air ;
 A laughing school-boy, without grief or care,
 Riding the springy branches of an elm. (90-95)

そして、キーツは想像力の赴くままに、牧歌的な遊びの国からやがて神秘的な黙示的体験を得る空と森を思いめぐらす。つまり、フローラとパンの国で遊びを味わい続けながら、やがて、*lovely tale of human life* (110) を彼は妖精と共に読む。しかし、より高く成長するためには (*for a nobler life*, 123) この国を抜けて、人間の苦悩と苦斗を知らなければならない。今、大空の雲の峰から、駿馬にひかれた戦車が孤を描きながら、緑の丘の木立ちに降り立つ。卸者は木や山と話を交わしている。又、彼の前を、さまざまな人間達が森の奥へと歩みを進めていく。或る者は笑いながら、或る者は嘆きながら、或る者はふり回り、又、空を見上げながら。これら全ての人々の語る言葉をも卸者は聞き取り、丹念に書きとめている。つまり彼は、この世の出来事の本質を学んでいるのだ。それがとりもなおさず *nobler life* の秘密である。キーツの幻は、ここで消える。そして、幻が去ったあとには、現実感覚が戻る。通俗性にひき戻そうとする力と、秘密をかいま見たあとの新しい現実感覚と。それらが重複して、彼を襲う。

The visions all are fled—the car is fled
 Into the light of heaven, and in their stead
 A sense of real things comes doubly strong,
 And, like a *muddy stream*, would bear along
 My soul to *nothingness*: (155-159. イタリックは筆者)

滔々と音立てて流れる現実の濁流。通俗と真実とがせめぎ合う激流。その中で、キーツの魂は、しばし、目くるめき、カオスの「無」へと押し流されようとする。しかし、それは真理がそこから花ひらく泥であり、何かを誕生させる温床でもある。このように、キーツの *nothing* は、常に積極性と創造性をはらんでいる。だから、キーツも決意する。

but I will strive
 Against all doubtings, and will keep alive
 The thought of that same chariot, and the strange
 Journey it went. (159-162)

それにしても、人間の真実をつかもうとする時、キーツの熱意は白熱し、願いは秘密を預かる女神へと切迫する。『ハイペリオンの失墜』に於いては、それは記憶の女神モネタで

あり、『睡眠と詩』に於いては、想像力（女神としての）である。fervid choir (73) は、その昔イギリスにおいても、想像力の女神に諧調の美しい歌声をささげていたのである。その歌声は、釣合いのとれた回転運動を生じて、惑星のように永遠に dizzy void (177) の周りを回転している、という。「目くるめく虚空」、それは先の「無へと押し流す泥流」とも通じる。「無」、「混沌」に生命を与える真理がそれを取り巻いて回転しているというのだ。プラトニズムをこのような形でキーツはこの作品に取り入れた。擬古典主義者達は、この真理の歌声を知らず、いわんや地上の美にも気付かなかった、とキーツの言葉は烈しい。更に注目すべきは、力（power）を表わす語をここで使いわけていることだ。ポエジーは、might (237) を持つ、尽きることのない光のしづきだ。strength (241) しか持たぬ物は、たとえミューズ姉妹から生まれた物であっても、いい換えれば、美しく強い物（sweet and strong, 232）を持つてはいても、それは詩の目的を知らず、ugly (234) だという。その目的とは、精神の労苦を癒す友となり、人類の思想を高めることである。地上に漂い続ける数々の美しい調べを想い並べたあと、キーツは自分の詩を規定しようとする。

These things are doubtless: yet in truth we've had
 Strange thunders from the *potency* of song;
 Mingled indeed with what is sweet and *strong*,
 From majesty: but in clear truth the themes
 Are ugly clubs, the Poets' Polyphemes
 Disturbing the grand sea. A drainless shower
 Of light is poesy; 'tis the supreme of *power*;
 'Tis *might* half slumb'ring on its own right arm.
 The very archings of her eye-lids charm
 A thousand willing agents to obey,
 And still she governs with the mildest *sway*:
 But *strength* alone though of the Muses born
 Is like a fallen angel: trees uptorn,
 Darkness, and worms, and shrouds, and sepulchres
 Delight it; for it feeds upon the burrs,
 And thorns of life; forgetting the great end
 Of poesy, that it should be a friend
 To sooth the cares, and lift the thoughts of man. (230-247. イタリックは筆者)

キーツは、一語の中に最大の両義性を込めることもあるし（sleep, death, nothing など）、オクシモロンの構造を整えてそこに観念の両極を込めることにも巧みであった。それらを理解するには、彼の観念のすそ野を観察することが必要であり、その時はじめて意味する物が深層に於いてとらえられる。「無」と「有」との葛藤、うつろう物の持つ美をとらえ

る眼、これらはそのすそ野をかたちづくる大きな要素といえる。又、それとは別に、キーツは時折、可能な限りの同義語を用いて分析的に観念を区分けする努力もする²³⁾。例えば、今の引用部に於いてすら、「力」を表現する語として、potency, strength, power, might, sway 等がある²⁴⁾。それによって、大きな目的を持つポエジーの威力というものが、他の力と区別されてくるのだ。とりもなおさず、それが希望である。

All hail delightful hopes! (264)

キーツは、この希望を、通俗と失望のにがい雑草から頭をもたげる、キンバイカの甘い花にたとえている。bitter weeds (249) と sweet (myrtle) (250) は、ここでは、別種の物として扱われている。しかし、既に見てきたように、キーツは「有」が「無」となり、「無」は「有」を生み出す、という基本的な認識をはじめから備えていた。眠りはめざめとなり、死は新らしい生となる。やがて、極めて自然に、怠惰 (Indolence)、憂うつ (Melancholy)、無為などの逆説がオードやソネットに歌われていくことになる。それと同時に、bitter と sweet との区別も失なわれ、bitter-sweet な現実をとらえ始める。例えば、1817年詩集では、リヤ王の痛苦は単に bitter teen²⁵⁾ であるが、後のソネットに於いては、the bitter-sweet of this Shakespearian fruit²⁶⁾ となる。それは、理想の中に現実を見、現実の中に理想を見る強靱な眼である。1817年詩集では、bitter と sweet とが分離しており、圧倒的に sweet な美と理想への傾斜が強いのである。しかし、これはキーツが tale of human life²⁷⁾ を読み重ねていくうちに成熟していく目である。

23) 例えば *HYPERION* に於ける 'grief' と 'sorrow' の使いわけ。grief は激しいが自己中心的で盲目的。一方 sorrow は、客観的な理解力もあり穏やかで広い悲しみ。Saturn その他の没落タイタン神達のそれは前者であるが、ただ一人 Clymene という若い女神のそれは後者。はじめて彼女が新しい太陽神アポロを呼ぶニーモジニーの予言を空に聞いて、grief を克服して sorrow を得た。Yet let me tell my sorrow, let me tell/Of what I heard, and how it made me weep,/And know that we had parted from all hope. (*HYPERION*, II. 259-61) 又、神となる前のアポロが抱いていた悲しみも他者への眼を具えた sorrow の方である。

24) P. O. D. 第6版によって、主として、might を持つ詩と strength を持つ詩のちがいに注目すると、
might: Great (bodily or mental) strength; power to enforce one's will (usu. in contrast with right). mighty: Powerful in body or mind. strength: Being strong. strong: Having power of resistance not easily broken or torn or worn or injured or captured or disturbed. power: Ability to do or act; particular faculty of body or mind. sway: Rule, government.

即ち、power は強弱にかかわらず、一般的に力をさす。strong (strength) は一般に肉体的、物理的な耐久力、強度をさし、又、他からの力に抗する受動的な力であることが多い。might (mighty) になると、肉体的にも、精神的にも秀でた力であり、他に積極的に及んで行く物となる。

25) *IMITATION OF SPENSER* (Now Morning.....), 22

26) *On sitting down to read King Lear once again*

27) *SLEEP AND POETRY*, 110

And they shall be accounted poet kings
 Who simply tell the most heart-easing things.
 O may these joys be ripe before I die. (267-269)

経験が未だ乏しくとも、理性 (reason) の力によって剔出され解明されなくとも、キーツの感覚 (sensation) には自明の目標である。というよりも、文学における経験的真実である。ここに、彼の詩の目標は最も直截に、力強く宣言されている。

But off Despondence! miserable bane!
 They should not know thee, who athirst to gain
 A noble end, are thirsty every hour.
 What though I am not wealthy in the dower
 Of spanning wisdom; though I do not know
 The shifings of the mighty winds that blow
 Hither and thither all the changing thoughts
 Of man: though no great minist'ring reason sorts
 Out the dark mysteries of human souls
 To clear conceiving: yet there ever rolls
 A vast idea before me, and I glean
 Therefrom my liberty; thence too I've seen
 The end and aim of Poesy. 'Tis clear
 As anything most true; as that the year
 Is made of the four seasons... (281-295)

この詩は、このあと徐々に穏やかな結びをむかえる。親しい友人の家で味わった、静かなひととき——想像力が遠くはばたいた「ねむり」——の思い出が回想され、再到今夕行なわれる友人達とのつどいを思い出す。それを待ちこがれて一晩まんじりともせず、仲間との楽しい時間を想像して朝を迎えてしまった。しかし、心は洗われ、爽快な朝である。*SLEEP AND POETRY* は一夜思い描いた眠りなき眠り (想像) を、翌朝一気にそのまま書きとめた物である、とキーツは告げる。詩的想像と友情とが経験に基づいて回想され、自然な共感を呼ぶ²⁸⁾。こじつけの理屈からではなく、想像力と友情への信頼が謙虚に述べられているからだ。

For sweet relief I'll dwell
 On humbler thoughts, and let this strange assay
 Begun in gentleness die so away. (313-315)

28) Letter 65 (February 27, 1818)

In poetry I have a few Axioms, and you will see how far I am from their Centre. 1st I think Poetry should surprise by a fine excess and not by Singularity—it should strike the Reader as a wording of his own highest thoughts, and appear almost a Remembrance—.....

詩的理想にまい進しようという胸の高ぶりがおさまり、友人達との同胞愛 (brotherhood)、友情 (friendliness) が回想される。詩が出来上がる時のしじま (silence)、そしてそのあとの愉快的な夜会。そして、明日の夜会の通知。その時には、次の機会の為にも一冊また本を借りて来よう、などと思いはじめると、もうわくわくしてキーツの筆は進まなくなる。はじめての夜会では、二羽の鳩がはばたくように室内の空気がふるえていたが、今またあの空気のそよぎと共に輝きながら人や物のイメージが、あの日の喜びとなって舞いおりてくる。まさに夜会こそは「悦びの宮」(pleasure's temple, 355) であって、その悦びを存分に味わうことこそキーツの願いであるのだが、しかし、とここで彼は別の大きな悦び、'sleep' に立ち戻る。

many, many more,
Might I indulge at large in all my store
Of luxuries: yet I must not forget
Sleep, quiet with poppy coronet: (345-348)

Sleep——、あの集いでも味わった、一瞬のしじまのことである。友人達の声がふと遠のいて、自分のまわりを、静かな別世界が取り巻く。室内には、昔の詩人達の白い胸像が置かれていた。

Sappho's meek head was there half smiling down
At *nothing*; just as though the earnest frown
Of over thinking had that moment gone
From off her brow, and left her all alone. (381-384. イタリックは筆者)

サッフォの見つめる「無」は、キーツをその時とり巻いていた筈の「無」でもある。自己を溶解して、新しい世界をうみ出す静寂である。これに比べれば、次々と現れる慈愛深いアルフレッド大王、孤独なコシウスコ、愛のよろこびに溢れるペトラルカとラウラの胸像も人間性の真実を教えてはいるが、思いの深さに於いてはサッフォの「無」をみつめる瞳には及ばないように見える。いわば、美も孤独も愛も、「無」という滋養ゆたかな創造力の根の上に息づいてのびていく茎であるから。その直感の上に、次から次へと回想が展開され、一夜まんじりともしなかったが、なぜか心はずがすがしく朝を迎えたのである。それが、眠りに勝る眠りである、とキーツはこの詩を結ぶのである。

The very sense of where I was might well
Keep Sleep aloof: but more than that there came

Thought after thought to nourish up the flame
Within my breast; so that the morning light
Surprised me even from a sleepless night;
And up I rose refresh'd, and glad, and gay,
Resolving to begin that very day
These lines; and howsoever they be done,
I leave them as a father does his son. (396-404)